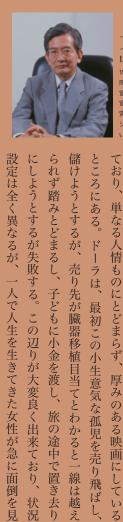
られ、 の鉄道駅の模様が胡散臭い人間も含めてその利用者とともに生き生きと撮 しの三十分は、リオデジャネイロの中央駅を舞台に、発展途上国の大都市 優賞の候補になるなど世界的に大変評判の高かった映画である。 グローブ賞(外国映画賞)を取ったり、モンテネグロがアカデミー主演女 (フェルナンダ・モンテネグロ) を受賞している。アメリカでもゴールデン ジル映画として初めてベルリン映画祭で最高作品賞の金熊賞、主演女優賞 い画は、 今回は、 ブラジルに新たなネオ・リアリズムが生まれたかと思わせるほどで ヴァルテル・サレス監督が一九九八年に撮ったものであり、 ブラジルの映画「セントラル・ステーション」を紹介する。 特に出だ

開封し、 ひねくれた初老の女である。 細々と生計を立てているが、 フェルナンダ・モンテネグロ扮する主人公のドーラは、 友だちと笑いの種にし、 ドーラのところに別れた夫と再会を望む手紙 金をもらって代書した手紙を投函せず、 挙句の果て、 捨ててしまうという性悪で 駅で代書屋をやり、 家で

演したアメリカ映画「グロリア」を思い起こさせる

る羽目になった孤児に振り回される様は、ジーナ・ローランズが主



子どもに小金を渡し、

旅の途中で置き去り

文·羽生次郎 text by Jiro HANYU 1946 年東京生まれ、69 年東大経済卒 同年運輸省入省、人事課長、運輸審議 官等を経て、2002年8月国土交通審議 官を退官。現在は財団法人運輸政策研 究機構・会長を務める。フィルム・コミ ション(FC)への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

しかし、一味違うところは、

前半にドーラの小悪人振りが良く描け

厚みのある映画にしている

単なる人情ものにとどまらず、

された孤児がドーラの手を借りてまだ見ぬ父のところに旅をすると

の代書を依頼した子連れの女性が、

ある日事故で死んでしまい、

を背景にした典型的なロードムービーと思われる方も多いと思う。 いうのが物語のあらすじである。こう書くとブラジルの広大な自然

鉄道と映画

リオデジャネイロ中央駅を舞台に始まる ちょっと性悪な初老の女の物語。

Central do Brasil

もし映 半分はかかる状況であるのが事実であると思う。 対比を効果的にしている。 オデジャネイロ中央駅の利用者と生活者が、 書いたように、 せいぜい良くできたロードムービーの一つという評価になってしま 的であり、 評が多い。 理解と愛情が育って行く様子が巧みに撮られていることを挙げる批 ジルをバスで旅行し、 わせるほどであるが、 れているところであり、 「セントラル・ステーション」の見所は、 都会生活でささくれ立った女性と母をなくした子どもとの間に やはり、 べ画であり、 、画の価値がそれにとどまるなら、 筆者も、 確かにバス旅行の間に見られるブラジルの広大さは圧 こんな駅は、 この映画を魅力的なものにした最大の特徴は、 主人公役のモンテネグロの存在感のある演技と、 一見の価値は十分にあるので、ご覧いただきたい このような評価に頷けるところは多い。 さまざまな人たちとつかの間の交流をする間 世界の大都市のターミナル駅の少なくとも これが後半の情感あふれるバス旅行との 危なっかしくて絶対に利用したくないと もちろん、 中央駅は、 状況設定の差はあっても、 父を探して、 リアリティをもって撮 美しいとか機能的 色々と考えさせら 広大なブラ 1]